
シュテル・ザ・エルケーニヒ

えーさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シュテル・ザ・エルケーニヒ

【Nコード】

N4448Z

【作者名】

えーさく

【あらすじ】

アホの子戦記で転生したヲタクの行き先がスパロボではなくリリカルなのは、しかも高町なのはに転生していたらという設定で描くりりカルマジカルもといりりカルマジウスなのは、始まりです。

プロローグ 高町なのは、始めました。(前書き)

導入というかテンプレですね。

プロローグ 高町なのは、始めました。

皆様初めまして、こんにちは、こんばんは、おはようございます。

高町なのは、3歳です。

いきなりのご挨拶に、3歳児ならぬ流暢で小難しい言い回しをしています。これが私の素です。

何故私がこのような行動をとったのか、簡潔に述べてしまえば、私が転生者であるからです。転生の詳しい経緯は、アホの子戦記をよるしく！

すみません。おかしな電波を受信しました。ちなみに私はヒーロー戦記からのファンです。

話しが逸れてしまいましたね。

とにかく、つい今し方、私は私が転生者である事を思い出したのです。

ですがまさかりリカルマジカルの世界で、しかも主人公の高町なのはに私になってしまうとは夢の端にも思いはしませんでした。

閣下、予想外にも程があります。

しかし驚いている場合ではありません。

このまま行けば、5年後、私はリリカルマジカルな戦いに身を投じなければなりません。

正直、自信はありません。ボディ的に言えば恵まれているのでしよう。しかし精神的には平和大国日本在住の自宅警備員。

こどもなりの怖いもの知らずに見え、正義感もあつた高町なのはならつゆ知らず。私のような小心者では万に一つも戦う心はないでしょう。リリカルマジカルは見ているから良いのであつて、実際にやれと言われてやりたいとは思いません。

魔法には憧れますが、私は平穩無事に2度目の人生を謳歌したいのです。それが私に出来る、この高町なのはへの贖罪なのでしょうから

|||||

1年が経ちました。

私はやはり高町なのはでなく、正しく高町なのはなのだ、この1年間で思いました。

この1年。私は元来のラノベ好きから発展し、良く本を読むようになりまし。しかし読むのは魔法ファンタジーな物ばかり、父様や母様におねだりして、魔装機神や第 次シリーズを買って貰ったり

しながら、スケッチブックにはわけわかめな発想や設定、理論ばかりを書いて、さらには電子機械系の本を読んだり、ロボットヲタクで物静かな子となっていきました。

本を読み、電子機械系の参考書を読み、理解する為、必然と理数系と文系は得意になったりはしたのですが、運動はからつきしダメでした。走れば転ぶ、ボールで遊べばボールに遊ばれる始末、これ程までに運動神経がダメだったとは思いませんでした。特に私の場合は男の大人の運動神経感覚がまだ抜けきらない為に余計ダメなのではないかと思っております。

運動出来なら、出来ないなりにやるしかない、私は方向転換。腕立てや腹筋背筋スクワットを敢行し、少しでも太らないようにします。喫茶翠屋は乙女の敵。その経営家である高町家は、元男の私でも気になるくらい3時のおやつが豪華絢爛です。代わりに乙女にとってはカロリーとの戦いという聖戦を強いられますが……。よく高町なのはは太りませんでしたね。

私でさえ2ヶ月+1キロに抑えるのがやっとだというのに。

4歳の一年間は、とりあえず魔法的な物を遊びながら調べ、カロリーとの大合戦の日々でした。

|||||

5歳になりました。

この年は幼少期のワーストスリーの年でしょう。

幼稚園から帰ってきたら、いつも迎えにきてくれるはずの母様は居ず、代わりに姉様が私を出迎えてくれました。しかしその表情には覇気がなかった。

家に着いて、挨拶をしてもシンっとして、姉様の返事以外には聞こえませんでした。

母様は店の方なのでしょうか？

しかし、昨日から父様が出掛けるということ、昨日今日明日の3日間は店を休業にすると一昨日の夜に聞きましたから、母様が居ないのは買物にでも行ったのでしょうか。でもそれならば姉様に覇気がないのが不自然に思えます。私は自慢じゃありませんが、姉様より中身年齢は大人です。自宅警備員でも人の顔から様子を読み取るくらいは出来ます。

そして覇気のない姉様の顔は、まるで何かを我慢しているかのようでした。

私は姉様には事情を聞かずに、自分の部屋へと向かいました。

私の部屋は、間取りこそ高町なのはのへやと同じなのでしょうが、一言で言い表せば、女の子らしくはない部屋でしょう。

プラモが飾っており、部屋のポスターもスパロボですから。

机に向き、スケッチブックを開き、また新しい設定や絵を書いては、息抜きに プレイしたりして過ごしました。

そして夜になると兄様の気配がし、そして母様の気配も家に帰ってきました。しかし、2階にまで漂う言い知れぬ感覚に、私は1階の様子を見に行こうとは思いませんでした。

気づいたら私はそのまま寝ていて、翌日となっていました。誰かに起こされた感覚はなかった為、いよいよおかしいと思い、1階に降りました。しかし1階はものけのから。

テーブルの上にはラップ掛けされた食事と、しばらく忙しくなるといふ旨の書かれた母様の置き手紙。

おそらくよっほど忙しかったのだろう。朝食はあっても、お弁当がなかった。

とりあえず朝食をレンジで温めつつ、冷蔵庫の中身から適当に食材をチヨイス。

この身体になつてから料理はしていませんが、2年のブランクなどなんのその。自宅警備員は伊達や酔狂ではありません。

フライパンに油を引き、出汁と刻んだニラを入れた溶き卵を投入。出汁巻き卵にします。

朝食をつまみながらお弁当を作る。少し行儀が悪いですが、御勘弁を、幼稚園の始まりは遅くとも、私の5歳児の身体ではこうでもしないと間に合わないのです。ちなみにキッチン周りには私の足場とする為、イスがズラリと並んでいます。

そして1人で迎えのバスに乗り、幼稚園から帰ってくれば姉様の迎

え、家に到着後は部屋へ、そして寝倒しての日々が一週間続いたあと、いよいよ色々とも私も気になってきてしまい、姉様にそれとなく尋ねてみたのですが、はぐらかされてしまいました。

しかし、最近の高町家はおかしい。家で母様を見かけることはなくとも、朝食やお弁当に夕食があり、置き手紙もある分、家には帰ってきている様子。

姉様は毎日私を出迎えてくれますが、日に日に顔が悪くなっている様子。

そして一番は兄様でしょう。日に日にピリピリとイラついているようで、道場の方から怖いと思える程の気迫のある雄叫びが聞こえることもザラです。

そして父様。この一週間、まったく姿も気配も感じません。ここまできると、私も嫌な予感が頭を過ぎります。

私の父様、高町士郎。

以前は世界を旅し、重役のボディガードなどを務めていたというとら八の設定は私も知っています。そしてSPの仕事中に殉職したことも。

ですがとら八では父様は高町なのは顔を見ないまま逝ってしまった人。時期が合いません。

ですが家族第一我が家の大黒柱の父様が一週間も帰らないのはそれこそ一大事を疑います。

ですが、母様も姉様も兄様も、私には話してくれませんが、

ガードの甘い姉様ですら話してくれないのならば、兄様と母様に訊いたとて無駄でしょう。子どもの私には座して待つしかないのが、辛い。

少し飛んで2ヶ月が経ちます。

この頃は高町家空中分解半歩手前とも言えるかもしれない時期でした。

2ヶ月経とうとも、父様は帰って来ず。冷静な私もいよいよ心が不安定になっていき、家に居ることを少なくするようになりました。それはただ単純に家に居たくないという私の思い。

未だに話しはされず、家族は疲れた表情を浮かべ、兄様は余計にピリピリとし、はっきり言つて最悪な雰囲気なのです。

もう六歳を迎え、来月は幼稚園も卒業。そして小学校に上がる身としてはとてつもなく不安定であり、そして嫌だった。

私に話してくれないのは、私が子どもだからではなく、私が本物の高町なのではない、高町なのはの立ち位置、存在を奪った赤の他人だから、家族ではないからなのでしょうか……。

ポタポタと流れ落ちる雫。

何故私は泣くのでしょうか。わかっていたことです。所詮私は高町な

のではない。別のナニカ。

本来の高町なのはには似ても似つかない私は、高町家の一員として暮らす資格など……。

気づけば足は近所の公園に向き、私はブランコに座っていました。

今更砂場遊びをする年齢でもありませんし。私はブランコの方が好きです。

ブランコをかなりの高さまで漕いで高さと速さに要らぬ思考が頭を過ぎる。

ここで手を離せば、家族は心配してくれるだろうか？

父様に逢えるだろうか？

あるいは頭を強かに打てば自分は死に、本来の高町なのはが帰ってくるのでは？

そんな考えが浮かび上がる程、この時の私は随分と追い詰められていたのでしょうか。

もうどちらかに一回転しそうな角度までブランコは上がり下がりを繰り返している。

でもチキンハートの私にはそんな勇氣もなく、結局はブランコから降りて、人の居なくなつた公園の滑り台の上で最近開いてないスケッチブックを広げました。

中には様々な魔装機や魔装機神のラフ画や設定。魔装機神のプラナーやエーテルに関する私なりの考察などなど。

いつか役に経つのではと書いていたスケッチブック。それをパラパラと捲り、とあるページでそれは止まる。

そこには私が理想とする魔法少女の姿。

杖を片手に脅威と苦難に立ち向かう不屈の心を持った少女、高町なのはのスケッチ。

無印の9歳、コミックの15歳、stsの18歳、さらに23歳と25歳。

私の覚えている限りの高町なのはが描かれていた。

私の、決して届かない目標にして理想の高町なのは。

高町なのはが一番星ならば、私は肉眼では見えないちっぴけな星でしかないのだろう。

私には愛も力もない。

リリカルマジカルでもとらいあんぐるハートでもない、『理』を真似ている私のような存在は所詮

暗がりゆく空を見上げれば、そこには輝く星光。一番星。

視界が歪む。

目に力を込めても歪みは強くなっていく。

こんなこと程度でないではいられないというのに、高町なのはが涙を流すのは誰かの為なのに

ポタポタと、スケッチブックに雫が落ちる。流れ出した涙は堤防を決壊させ、鉄砲水となり吹き出す。

「…わ、たし…は、なぜ、たか…ま、ち…なの、は、にっ」

辛い。悲しい。怖い。寂しい。

色々な感情がぐちゃぐちゃになって吹き出す。もうせき止めは出来なかった。

「だ、れか、たすけ…て…」

2年間。たったそれだけでも心を病むには十分過ぎた。とくに自分が高町なのはとして産まれたから余計に。

高町なのはの幸せを奪ってしまった。

高町なのはの居場所を奪ってしまった。

高町なのはの存在を奪ってしまった。

いずれは戦いに身を置かねばならない運命。

普通の凡人には過酷過ぎる運命だった。

特に高町なのはが歩むだろう16年を大まかに知るだけに余計。

『Please do not cry. (泣かないで下さい)』

「うっ…ぐすっ……………えう？」

ふと耳に聞こえた電子音調の英語。

「…だ、だれ、です、か……………」

『Please do not cry. I will als
o become sad if you are crying.
(泣かないで下さい。貴女が泣いていると、私も悲しくなります)』

顔を上げて、誰も、どこにも、なにも居ない。

「そ、ら…みみ？」

『It is not a mishearing. I am
in a you side perfectly. (空耳ではあ

りませんよ。私は貴女の傍に、ちゃんと居ます()」

「わた、し、の…そば?」

『Yes . Therefore , please do not cry . My meister who loves ()はい。だから泣かないで下さい。愛するマイ・マイスター()』

また、涙が溢れてきた。

でもそれは……

『Meister? Did it carry out if you please? In something , I am impoliteness by no means . ()マイスター?どうかしましたか?まさか私が何か失礼を()』

「いい、え……いいえ、違い…ます」

嬉しかったんだ。

独りぼつちだと思い込んでた自分に、傍に居てくれた存在が居るのを。

「あなた……なのですね?」

スケッチブックに語りかける。

それは奇跡か、あるいは高町なのはである自分が書いた物だからなのか

『Yes・That's right・My meister
(はい。その通りです。私のマイスター)』

スケッチブックから聞こえる電子音は、とても温かに包んでくれるような声だった。

誰も居ない。私達しか居ない公園で、私は声も抑えずに、泣き散らした。

最初で最後にするから、今は自分の為に泣き、そして産まれてくれたことに感謝を込めて、泣いた。

そしてまた1ヶ月。腕に包帯を巻いて申し訳なさそうな顔をする父様に、私は素直に「お帰りなさい」と言って抱きついた。

少し苦悶の聲が聞こえましたが無視です。3ヶ月も心配をかけた罰なのですから。

第1話 タイムリミットまで、あと (前書き)

連投です。

第1話 タイムリミットまで、あと

side：高町なのは

あの日の出逢いから3年が経ち、私は私立聖祥大附属小学校3年生として過ごしています。

あの日以来、私と共にある自称アリスは、簡単に言えば、私の著書した魔導書で、私の使い魔のような存在であるらしいのです。

まだシステムの未完成のアリスは、その活動には私からの魔力供給を受けて活動しているそうです。

夜天の書よろしく自立飛行とかも出来ませんが、私はアリスのお陰で大分救われました。

父様は、あの一件以来、長期間、家から居なくなることもなくなりました。あってもちゃんと、2日3日で帰ってきてくれます。

未だに何をどうしてあんな怪我をしていたのかはわかりませんが、3ヶ月という期間を考えれば、幾つかの予想を推論出来ますが、所詮推論。気にしないことにしました。

そして私は私立聖祥大附属小学校に入学を果たし、初めての友人を得ました。

「あ、おはようなのは」

「おはようなのはちゃん！」

バスに乗り込むと、その初めての友人であるすずかとアリサが手招きしてるのに気付き隣りに座りました。

「おはようございます。すずか、アリサ」

「前から時々思ってるけど、なーんか固いわよね、あんたは」

と、アリサが口をとがらせる。

「そうは言われなくても、これが私ですから。今更変えようもありません」

中身が一応大人であるからにして、高町なのはのように子どもを私に出来るわけもなく、少々演じているような部分も無きにしも非ですが、これが『私』なのです。

いつも通りに登校し、いつも通りに授業を受け、いつも通りの昼を迎える。

今日もそうなると思っていました。ですが

昼休み、学校の屋上。

いつもなら楽しいはずの昼食。ですが今日は色を失い、いつもとはまったく異なる昼食です。

昼食前の4時限目の授業は将来の夢について

とうとう、来てしまったのです。運命のタイムリミットが

今日は4月22日。もし劇場版コミックのように4月26日が運命の日であるならば、あと4日。不吉過ぎるのにも程があります。

「で、なのはちゃんは？」

と、すずかに尋ねられました。恐らくは将来の夢についてでしょう。

「…私ですか？」

頷く2人に、どうやら心中はさらけ出していないと安堵しつつ、考えを述べます。

「翠屋を継ぐのもいいですが」

私はバックからA4サイズのスケッチブックを取り出す。

「イラストレーターやアニメーターというのも、道筋のひとつかも
しれませんか」

叶わない夢　　なのかも、知れませんが。

「なるほど、あんた絵、得意だもんね」

「なのはちゃんならきつと凄い有名になれるよ！」

「ありがとうございます。すずか」

スケッチブックに何が書かれているのか若干知っている2人は納得
してくれたようです。

放課後。2人は塾の為、校門でお別れです。

私は塾に行くよりもゲームとか新しい設定を考えたりする時間が欲
しかった上、今のところ全筆記テストオール100点を独走中の為、
塾には通っていません。

帰り際、人気の少ない方に歩いていったら、海岸線まで来てしま
いました。

人の気配がなくなった途端、進級してから良く起こるようになった
発作に胸が苦しくなる。

「くっ、はっ、うっ、はっ」

服を握り締め、苦しさを耐える。

タイムリミットを迎えるプレッシャーによる発作。

戦うことへの恐怖が、私の心を蝕んでいた。

『マイスター
Meister』

「アリ、ス……」

スケッチブックを胸の中に抱き締める。

私の本当の意味での味方は、彼女だけしか居ない。

アリスは私が記述した物すべてを覚えている。言わば辞書・ライブラリー……。

だから端々にも、これから起こること、私の正体も知っている。

高町なのはでなく、『私』自身の唯一の味方。愛おしい、私のファミリア・もっひとりのわたし……。

「ア、リス……わた、し……」

『Please cry and breathe out now.
It muffles, although it is awkward.
（今は泣いて、吐き出して下さい。拙いですが、消音をしておきます）』

「うっ、あ、つつ、うあああああああああーっ
！……！」

私には勿体無さ過ぎるファミリア。

この子のお陰で、私は泣く事が出来る。私はやっぱり弱い、ちっぽけな星でしか 否、スペースステブリの星屑でしかない。

「はっ……はっ……」

『Could it settle down? Meister
（落ち着けましたか？マイスター）』

「……はい。一応は……」

涙を袖で拭い。幾分か楽になれた心持ちで、私は帰路に着きました。ですが、この苦しみでさえ、まだ序の口でもない程軽い物だと、この時の私は知る由もありませんでした。

第1話 タイムリミットまで、あと (後書き)

このなのは見た目も性格も喋り方がマテ子の星光ことセイことシユテルですが、ヲタク成分と大人頭脳の為、思考がかなりまわりまくり超賢く見えますが、一般凡人だった故に、かなり臆病で精神的強さに、本家なのはと銀河中心核とミトコンドリア並みの差があります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4448z/>

シュテル・ザ・エルケーニヒ

2011年12月15日03時47分発行